



## 本田先生の人となり

海老原 充

本田先生の印象はと尋ねられて、先ず第一に、本田先生ほど名誉とか地位にこだわらなかった研究者や大学人は少ないのではないかと、ということです。別の見方、言い方をすれば、これは極端に聞こえるかもしれませんが、本田先生ほど研究に対して真摯に取り組んだ研究者は少ないのではないかと、ということです。本田先生は昭和19年に東京帝国大学理学部化学科を卒業後、いろいろな職場を転々としています。三井化学工業目黒研究所、立教大学理学部（助教授）、東京大学理学部（助教授）、チューリッヒ工科大学（ETH）（研究員）、プリンストン大学（研究員）、カリフォルニア大学サンディエゴ校（研究員）、東京大学物性研究所（教授）、日本大学文理学部（教授）と8つの研究機関・大学を移動しています。

私個人のことを書くのは本意ではありませんが、本田先生との関わりを少し書かせて頂きたいと思えます。私が本田先生の研究室に入るのは単なる偶然からでした。東大理学部化学科を卒業し、大学院に進学するに当たって、卒業研究を行った研究室である浜口博教授の研究室に進学するつもりでいました。卒研では毛髪試料の中性子放射化分析を行いました。当時、浜口教授の定年が近いこともあり、修士の学生は受け入れられないということになり、物性研究所の本田研究室に進学することになりました。浜口研の同期の4名のうち私と小山康直君（現・大分高校理事長）が本田研へ、蒲生俊敬君（東大大気海洋研教授）と大隅多加志君（電力中央研究所研究員）が海洋研究所の堀部純男教授の研究室に進学しました。その様な状態でしたから、本田研に入るまでは本田先生の研究やその人となりについてはほとんど知りませんでした。本田研に入って、最初に強烈に目にした光景は、教授室でした。それは、卒研の時の浜口教授の教

授室が頭にあったからでしょう。本田先生の教授室は学生を含めた研究室構成員のお茶飲み場でした。単なるお茶飲み場と違うのは専門書が取り囲んでいるのと、秘書の方の机があることだったでしょうか。で、本田先生はというと、実験室に置いてある質量分析装置の後ろ側、といえば広そうに聞こえますが、当時の質量分析措置は「でかい」の頭に「ばか」がつくくらいの代物で、その装置が占領する部屋（マス部屋と呼んでいました）のまさに隅っこに机を置いていました。恐らく、教授はこうあるべきだなどという考えは全くなく、みんなの団らんのかたまりとして教授室を提供されたのだと思います。

大学院の指導方針は実に自由なものでした。はじめにおおよその内容を説明して頂きましたが、あとはほとんど自由に、好きなようにさせて頂きました。研究指導に対して無責任かという、決してそうではなく、かなり丁寧にいろいろ指導して下さいました。但し、それには条件がつきます。その条件とは、こちらから積極的に働きかけた場合には、ということです。ある程度実験データがたまると、その結果を踏まえて次の実験をするような時に、実験ノートをもって、マス部屋を尋ねるのですが、仕事をしていて手を休めて、あのマス部屋の隅っこで、実に懇切丁寧に対応して頂いたことを、今でも良く覚えています。実験にも良く一緒に行きました。実験というのは、主に神奈川県逗子市にあった立教大学原子力研究所にでかけて、そこにあった研究用原子炉をつかって中性子放射化分析をするためでした。結局、卒研での経験が役に立ちました。分析した対象は隕石に代わりましたが。原子炉の照射孔に試料を挿入し、ある程度照射した後に試料を取り出すのですが、実験によっては線量がかなり高くなる場合があります。その様な場合には我々学生を遠くに離し、本田先生が試料の取り扱いを引き受けられました。まさに「人間の盾」となって。行き帰りは本田先生の車で、本田先生の運転ですから、先生と学生の関係が全く逆転していました。私が修士の学生のと時助手の方が亡くなり、それ以降、助手を取らずに定年まで通されたのですが、我々学生に取っては、それが本田先生との距離を縮めることになり、今思えば非常に幸運だったと感じています。

はじめに書きましたが、本田先生の経歴はかなり異彩を放っています。大学卒業後、それほどアカデミックポストにこだわりが無かったのかもしれませんが。立教大学理学部に籍を置ききっかけは同大学に理学部を設置するために乞われて移ったとか。東大に移籍したのも乞われて動いたのかもしれませんが。その後、文部省の留学生としてスイスに出かけられ、結局、東大を退職し、外国に留まる決意をされました。スイス留学前の本田先生は分析化学の分野では将来を嘱望される若手研究者だったろうと想像されます。当時、最先端の研究であったイオン交換樹脂に関する著書を2冊残されていることから判ります（本田，1954；本田ほか，1955）。また、1953年の第五福竜丸事件を受けて行った放射性物質の調査結果をまとめて発表した論文では、当時の東大化学教室の無機分析系先生が著者に並んでいます。木村健二郎、南英一の次に本田雅健の名前があります（木村ほか，1954）。察するに、スイス留学から戻れば、いずれは東大化学教室の教授になるべき新進気鋭の助教授と誰もが思っていたのではないのでしょうか。その途を自ら絶たれた。しかも、外国での生活は立場の保証されない外国人研究員としての道と引き替えに。これは並大抵の決断だったとは思えません。先生、学生という関係から離れて、かなり年数を経たあるとき、そのわけを聞いたことがあります。答えは、あのまま日本にもどっても研究者として満足することができないと思ったから、と。確かに東大といえども第二次世界大戦敗戦後の研究環境と欧米の一流大学のそれは、今では想像できないくらい大きな違いはあったでしょう。それにしても、そうした決断ができるものか、どうか。間違いなく、そのうしろには、自分に対する絶対の自信と研究に対する純粋な愛情があったのだらうと思います。

本田先生は非常に率直に人物評価をする人でした。そうした場面に遭遇すると、自分がその矢面に曝される場面を良く想像し、身が縮む思いをしたものでした。人物評価の基準は、どのくらい真摯に、かつ正直に仕事（研究）をするか、ということだったと思います。例えば、東大時代についての先輩として南英一先生を随分したっておられた様子で、南先生の名前は幾度となく本田先生の口から聞きました。間違いなく、本田先生が最も尊敬された研究者だったと確信します。その理由はいろいろあり、南先生とは面識が無い私にはただ想像するしかありませんが、本田先生の科学者としての生き方、ノルムに通じるものが

あったのかも知れません。分析データに対する思い入れ、信念もそうだったのでしょう。我々学生はデータの重要性を徹底的にたたき込まれました。議論が間違っているとしても、データが正しければずっと生き続けるものだとよく言われていました。ただ、だからといって、データを出せばそれで終わりと言うことではありません。恐らく、若い頃、東大に戻らずに海外に留まったもう一つの理由がここにあると考えています。この点は本田先生に確かめたわけではないので、私の偏見かもしれませんが、恐らく、分析化学に展望が見いだせなかったのではないかと思います。分析データは重要だけれど、データを出すだけでは技術であり、データを通してその先にあるべき自然の原理、摂理を明らかにしないことには理学として意味が無いのではないかと。残念ながら、帰国後にそうした展望はすぐには描けなかったに違いありません。欧州留学前とその後の本田先生の仕事を見れば、こうした思いを抱かれたことは疑う余地のないことと確信します。なお、本田先生の敬愛された南英一先生は東大化学教室の教授ではなく、鉱物学教室の教授にられました。

本田先生は学生を指導しながら、自分の研究を平行して進めておられました。私が学生の時、質量分析計を使う機会がありました。私が実験していると部屋の隅から現れて、後ろから様子を眺めては、遠慮のない質問を浴びせてきました。時には鼻歌を歌いながら。鼻歌はいろいろな機会に聴きましたが、最も良く歌っていたのはモーツァルトのオペラ「フィガロの結婚」から「もう飛ぶまいぞこの蝶々」の Aria でした。質量分析計では自分のマシンタイムをとって、自分で測定をされていました。この、自分で主体的に実験や研究をするということは、亡くなる直前まで続いていました。東大を定年になり、日大文理学部に移られてから、私も遅まきながら本田先生の研究の一部を踏襲しようと、隕石中の $^{53}\text{Mn}$ の定量を始めたことがあります。都立大の客員教授として足を運んで頂きました。共同研究の一環として、学生にもいろいろ教えて頂いたのですが、実に丁寧にやさしく接して下さい、学生も先生のファンになったくらいでした。ただ、学生の出したデータには常に目を光らせ、率直な、ときには辛辣なコメントも出てきました。本田先生は、亡くなる半年前にオーストラリアのケアンズで開かれた隕石学会で講演されました<sup>3)</sup>。それまでもしばしば国際学会を含めて講演されていましたが、どれも本田先生のオリジナル研究で、ご自分で責任をもって実験したり、考察されたりしたものでした。勿論、晩年は自分で実験することは少なくなり、共同研究者が手助けしたのですが、恐らく、誰一人としていやいやつきあって実験していた共同研究者は無かったと思います。だからこそ、92歳まである意味で現役を通せたのだと思います。

学生として、研究者の後輩として、本田先生からは実にいろいろなことを学ばせて頂きました。今、学生を指導する立場になって、いつのまにか本田流を踏襲しているな、と気がつく場面が多々あります。これは大学院時代の師弟関係が、人と人との結びつきを最も強くさせるものである以上当然のことと思いますが、その意味で、私に取っては本当に良い師弟関係が持てたと感謝しています。その本田流を少しでも次の世代の学生に伝えることが本田先生の恩に報いることであり、また、本田先生の遺徳を残す道だと考えています。本田先生に直接いえば、きっと迷惑そうな顔をして「ふーん、そうかー」とでも言われそうですが。

#### 引用文献

- 1) 本田雅健 (1954) イオン交換樹脂とその応用. 南江堂.
- 2) 本田雅健・垣花秀武・吉野論吉 (1955) イオン交換樹脂：基本操作と応用. 廣川書店.
- 3) 木村健二郎・南英一・本田雅健・横山祐之・池田長生・不破敬一郎・夏目晴夫・石森達二郎・佐々木行美・酒井均・水町邦彦・浅田正子・阿部修治・馬淵久夫・鈴木康雄・小松一弘・中田賢次 (1954) 第五福龍丸に降った放射性物質について. *Japan Analyst*, 3, 335-348.

(首都大学東京教授)